

川崎白雲作品集より (11)

19. 山 (54歳)



135×70

20. 水 (56歳)



135×70

「新書芸」のグループを作って、新しい手法の研究作品を発表した。径七センチ、長さも十センチばかりの筆（文輝堂製）を用いた。「山」や「水」のイメージを率直に表現した。



川崎 白雲 先生

清流鏡川の如き白雲先生

塩瀬 白真

「道元の言葉遣して 春の駅」
「杖先で古筆をなぞる師 春浅し」
H3・1/18白雲先生を高知駅に見送った時の事であった。「他は是にあらざる」せよ塩瀬君、誰か、どの様に百歩先を行こうが、自分は自分の只今の一步である。と説き赤いベレー帽がよく似合う笑顔を残して、又大阪へ車窓の人となった。ほんの少し首をかかげて…

H2、鏡村の構造改善センターで開かれていた、白雲先生書展を、全くの偶然で訪れて、その書のスケールの桁外れの大きさに仰天する。以来フラックと故郷鏡村を訪れる白雲先生の追っかけをやる事となりました。
当時は書家として厳しさが残る先生に、追っつけられる私を、村の議員さんがそつと情報を教えてくれたものでした。

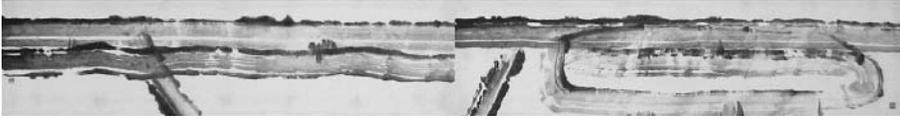
展示されていた限定印刷B4版の白雲臨書風信帖の何か深い奥行きに打たれ、一冊をいただきたいと、応接室の床に土下座してお願いしたら「あんた誰？」とふり返った白雲先生ご夫妻にあきられて、出会いははじまりました。後に禪の研究ノートが見つかり、先ほどの教えは、道元の典書教訓という有名なものであるとわかり改めて、先生の深さに感動する事に… 又孟法師など臨書の一文字、一文字を分解研究したノートに又びつくり…この様な勉強の仕方が有るのかと…コピーをお願いして又叱られる「バカ者！それは自己が発見して行くものではないか」と…

高知駅に着くと、大きなリュックの中の作品を幽玄斎へ表具依頼に、次に上町五丁目塩瀬実家（岡林）二階に、作品を広げて解説を下さるのを楽しみに数人がこれを囲む会がスタートする。しかし後にあまりに実技の未熟な我々にあきられて、鏡村中央公民館へとりこわされて残っていない）、にて、実技の実習をして下さる事に、三日会のメンバーと、毎日同じホカ弁を、楽しそうに召し上がられるのが心に残っている。後に少しずつ、優しくなつてゆかれた。

鏡村役場の一隅で、後の村長 山崎統様が当時は教育長でしたが、朝から一日中孟法師「ページ」の声をかけて下さった私を見て、「疲れましたね」と雲先生の思い出です。

起筆の大切さを忘れる事が出来ません。手島先生書話「学書指針」を賜り、又天来先生の学書室跡をいただき…いつの間にか白雲先生が私の中で偉大なる師となっております。万謝あるのみでございます。

川崎白雲作品集 より (12)



35×135×2

21. 平原 (54歳)

「ブラシの詩人」に
まとめられたアメリカ
力巡回の作品の中で
も代表作のひとつで
ある。

広大なアメリカの
平原を、一作で表現
して、余りある半切
横二枚を連ねた小品
ではあるが：



70×238

22. 岸壁に： (60歳)

岸壁にきざみこまれし
わが筆の
悲歌は朽ちざり
身は朽つるとも

梅村



川崎 白雲 先生

白雲先生の書に暖かさ

藤崎 裕水

一九九一年の九月、水のきれいな山里で白雲先生と出会いました。
白雲先生は、鏡村の構造改善センターで貫名松翁についての講演をなさった後、揮毫してくださいました。その間、作品を書く時の心構え、筆の持ち方、墨の擦り方など細部にいたるまで指導してくださいました。

その場で書かれた作品のどれもが、柔軟な感性と表現力により呼吸しているのに驚きました。そして、あたたかく、気品高い書に見惚れておりました。

この講演会を機に、白雲先生の書と人柄に魅せられたわたしは、膨大な量の作品、貴重な資料、一緒にいただくお弁当を楽しみに頻繁に鏡村に足を運ぶようになりました。

鏡村に着くと、まっ先に白雲先生のスケッチブックを開きました。白雲先生が常日頃大切にしている言葉を書いて、丁寧にスケッチブックに貼った手作りの作品集です。時を忘れ、わくわくしながらいつまでも見入っておりました。

白雲先生が、初めてわたしにと、書いてくださったのが「素朴」という作品です。もう二十年あまりたちますが、いまだに「ありのまま、無理しちやいかんよ」と話しかけてくれます。不思議ですが、白雲先生の書とは対話ができます。

世俗の榮譽、肩書きなどをあつざりと捨てて、何事にもとらわれず、飾らず生活なさっている白雲先生のお姿のように、どの作品も自然で無理がなく、暖かな人の匂いが立ちのぼってくるようで、接する人の心をほかほかにしてくれそうです。

白雲先生の書ほど理屈や説明ぬきでわかりやすく、抒情に満ち、人の心を酔わせる書にであったことはありません。世の中がどんなに移り変わろうとも、人の心をとらえ永遠に慕われ続けると強く感じております。

川崎白雲作品集より (13)

23. 山嶺卓杖： 一九七六年（六七歳）



自作漢詩（七言詩のようである）

135×35

24. 寒に耐えて梅花近し 一九八二年（七三歳）



135×35



川崎 白雲 先生

ふるさと鏡での晩年

森澤 文雄

私は、晩年過ごされた鏡村での先生の生活を残して置ければと思います。
平成元年四月二十日、鏡村制百周年記念の集いを開催その席上、鏡村名誉村民に、その後頻繁に帰郷され、高知駅から半紙の額を小脇に背中には重いリュックを背負い、決して我々が途中で「車に乗りませんか」と言っても歩いて行きました。晩年ご本人無理したと思っただけでなく、私に「君の言ってくれたことがよくわかった。若いときのように思っただけ使われん膝へ来た」と大変悔やんでいました。

残される作品整理のためにも平成八年一月、鏡村支援ハウスへ入所平成十年七月まで毎日ギヤラリー白雲へ自然を楽しみながら一人で歩いて出勤、この間女性の書家の方々が中心になり三日会として、先生のお世話をさせていただきました。書家の皆さまは先生から直接指導を受けられ、大変感動され書に対する思いをより一層深められ今日の書活動に生かされていると思っております。少し体調を崩され平成十年七月十七日〜二十四日まで朝倉の「やすらぎの家」に同年九月二十四日に朝倉の「長命荘」へ平成十一年五月十七日同施設より大津へ寝台車で帰られました。

若い職員達と交替で先生と寝食を共にしたこともあり書に関して全然の素人の私に文字をとおして多くのことを教えていただき元教育者であった先生の指導に感謝しております。

多くの村民の方々も先生に頂いた「書」を家宝としております。ありがとうございます。

平成十七年四月九日〜十三日まで「ギヤラリー白雲」で久子さんが先生をしのぶ「横山久子書展」を、その時の作品に「お父ちゃんおおきに」という作品がございました。正にその言葉が先生にお世話になった全員の代表の言葉だと思います。「先生おおきに」これからも皆で作品を見ながら勉強します、ほんまにおおきに」

以上です。限られた文字数があるので、もっともつと、と思いが、しかしこれ以上は無理です。

後は点検修正よろしく、師に以て鉛筆字はへたでいかん「笑ってはダメ」（元鏡村中央公民館長）

〈捕逸〉

八月号の

22、「岸壁にきざみこまれし」
沖繩真武仁の丘に建てられた摩崖碑。時事通信社西岡政徳社長の依頼によって建てられたと聞く。

私は現地を訪問したことはないが、確かに歌は残っているというが、「梅村」の名は消されていたとか…。確認しておきたいひとつである。 春洋

川崎白雲作品集 より (14)

25
根



33×40



川崎 白雲 先生

追想「白雲先生」

三谷 萬佐雄

長い人生の道中で、私たちは数えきれないほどの多くの人たちに出会い、いろいろな係わり合いをもち、そして別れて行かねばならないのです。その人との出会いがたとえ短い期間、あるいは少ない機会であったとしても。

心の底にほのぼのとした暖かい思い出を残して去って行かれた忘れない方々が何人かおります。私は白雲先生もその一人です。先生と出合ったのは、平成二年十一月に旧鏡村で先生の個展があった時です。偶然それを知り同村まで、出掛けて行つたのが始まりです。

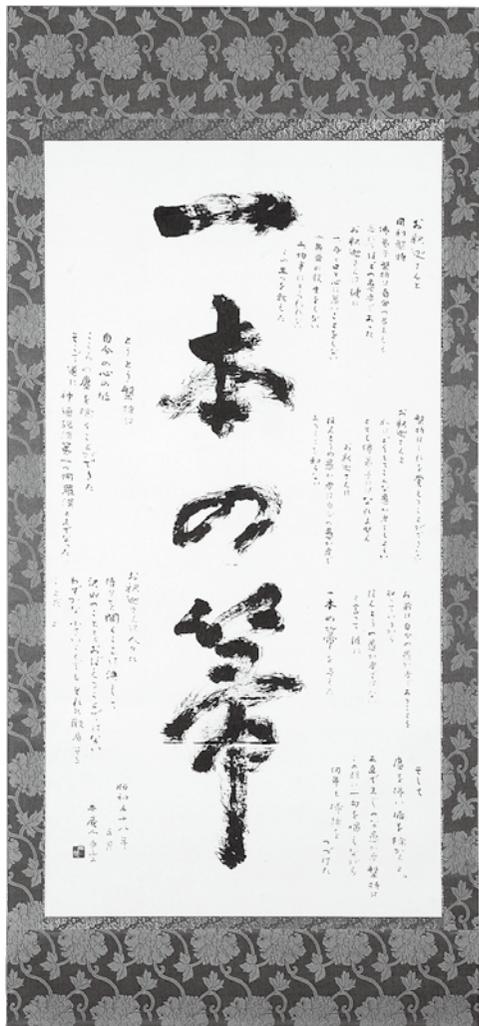
その後は、先生が帰郷するたびに、先生の宿泊所の高知市と旧鏡村をふなれな運転で送迎の往復でした。そんなことからほぼ平成八年まで続き、誰よりも先生に接する日が多かったように思います。白雲先生の一つには、教育者の模範といわれるべき人だったと痛切に感じています。書家達も先生に指導を求め来る人も多くなり、そのうちに先生からも私に書いてみたらといわれ、書家でない私は筆をとって、はずかしながら作品をみていただき、ほめていただくなど楽しいひとときでした。そんな事から私の家には先生の書がかかっています。その一つに横書きで、漢字とひらがなまじりの作品があります。先生いわく、土佐人は技術めんなどから避けるといわれてきました。また旧鏡村のRIOのギャラリー白雲は、単なる書の展示のみならず白雲先生が、おのずから自・他作品の保存の適否について検討をし、先生が書く筆順などもビデオにおさめ、鑑賞と同時に研究の機能を有する場を作るために、白雲先生、旧鏡村の皆さん達が一丸となつて努力してきたと思います。人に勇氣と希望をあたえて下さった先生、本当にありがとうございました。

川崎白雲作品集より (15)



川崎 白雲 先生

26 一本の箒 (全紙軸) 74歳 昭和五十八年五月 無庵人白雲



「道元」の本をよんでおられるのを見た。自分の読んだ本で、じっくりと考えて熟した頃、書話会でお話して下さったり、作品にまとめられた。

135x75

書は心画なり

田内 桜霞

白雲先生と私を結びつけたのは、平成四年、高
新画廊での「あじさい書展」でした。この時、観
に来られた、旧鏡村村議の高橋さんがあなたこの
の作は、白雲先生の書に似ていると言われた。そ
れは短い詩文で、「星の王子様」のくだりを書い
たものでした。そして次の日も、彼は来られ、白
雲先生の作品を是非、鏡村に観にきてほしいと言
われ先生の小さな作品を数点点上げたのです。

私はそれを観た時、何とも言えない強い衝撃を
受けました。この様な「書」を書く人がいるのだと。
後に白雲先生から教えを受けた「書は心画なり、
もとは心。技だけで書くものではない。」という
ことに通じる部分を感じたのかもしれない。私は、
まだこの時点で川崎白雲という人がどのような人
か知りませんでした。その後始まったのです。白
雲先生と高知のメンバーとの交流が、先生はこの
集りに「三日会」という名をつけてくれました。
旧鏡村の「リオ」には、二〇〇〇点以上の先生
の作品があります。この全てをビデオ撮りし、一
作一作ランク付けをし、私達「三日会」はその
お手伝いのかたわら、その作品に対する先生の
思いをうかがいました。「作品は作るものではな
く生まれるものなのです。よい線を出そうと思っ
たら、人間が出来てなくてはいかん。」

後に鏡村「ほほえみ」の施設にいた時の先生は、
よく電話をかけて来られました。真夜中に「田内
さん、お月さまがともきれいだよ。観てごらん」
とか。「田内さん、つるしてくれた柿は、もう食
べていいかい？」とか、「あなたに書いてあげた
巻子にする為の書が出来たから取りにおいで」と
か。そして「思い出多し」と書いてくれた事と
か。先生の八十四才から八十九才までの短い期間
でしたが、ここには書ききれない、いっぱいとい
っぱいの貴重な教えと、思い出をいただきました。
ありがとうございます。

合掌

川崎白雲作品集より (16)



川崎 白雲 先生

私たちは最後の弟子か

坂本 扇翠

27. 神路山日の丸映えてへんぼんと



135×35

調子に乗り過ぎないように、左手で書いた作品。

28. 旭日を拝す



135×35

旭日を拝す。二見浦にて 白雲

鏡川の清流に沿って北へと自然豊かな鏡村（現高知市）へお伺いしたのは、今から十三・四年前のことになりました。
白雲先生のお名前が存じていましたが、左手で書かれたり、逆からもお書きになるすごい先生だとお聞きしていました。

まず先生との出会いのきっかけは、私達の会の四人で「あじさい書展」を高新画廊で開催しました。その時に偶然にも鏡村の高橋さんが見に来て下さり、白雲先生のことを熱く語りられました。私は仮名の分野にいたので皆さんよりも相当遅れて参加させていただきました。多分最後の弟子ではないかと思われまふ。初めは厳しい先生だと思っておりましたが、次第に穏やかになられお言葉に甘えまして、時折お邪魔してご指導受けることになりました。

九成宮醜泉銘、孟法師碑、貫名松翁等、臨書から波法、俯仰法とかの筆使いを手にとって教えて下さり、大きな収穫となりました。

作品の創作にはまず古典に親しみ、目を養い臨書に徹することによって独自の書境を開いて行くものだと教わりました。このことは仮名の世界にも通ずるものと思います。

晩年の先生は更に気性がおやさしくなり、田内さんと寮へもお伺いしました。先生は「昔操った杵柄」筆を持ちますと急に生々となり目も輝いて参ります。お弁当持参で、三時か四時頃には帰宅しましたが、その時先生は出口まで来られ目に涙を浮かべ見送って下さいました。お寂しそうで心が痛みました。ほんとうに不思議なご縁で、短い期間でございましたが、中味の充実した貴重な体験をさせていただきました。心より感謝申し上げます。どうか自然に囲まれた鏡の里で、ごゆっくりお休み下さい。ご冥福をお祈り致します。ありがとうございました。

台掌

川崎白雲作品集より (17)

29. 塞翁馬 全紙軸



135×70



川崎 白雲 先生

(白雲先生からの便り)

お手紙の終わりに「心和む」とありましたので、貴女には、これを書いてみました。書いてみると、書きにくい、何枚か書いてやっとな……
日常生活でうっとうしく、気がめいつてしまうことしばしば……
これが人生、というものと毎日のように思います。お一人で生活なされている、よくわかります。私以上に、多いほど修業になるありがたい、と思うことですネ
貴女の一生：長いですよ 心和む よい言

葉ですよ。

四月に入ったら、日は決定していませんが森沢さんと話しておりますので、おあいできると思います。
貴女は貴女の道を歩くことです。八十五にもなると、こんなに字を書きまらなくて、又後で見返してみると全くちがった字を書いてるので、驚きます。
たよりない私のことで少しでもおなぐさめになれば、幸、この上なし、ですが。
どうか、ゆつくりかまえて、安芸の海を想
起して：それで今思い出すのは貴女の眼が

少し充血していられることがありました。

お一人で生きるので当然、と思いがすが、十分睡眠をとって下さいよ。
強い線を出そうとすると体が十分健康でなければ書けません。はりきつた書を書いて下さい。
貴女を想うと、大坪館長さんを想います。書のこと以外のことも沢山あるように思っています。
書も、漢字の蘭亭叙、集字聖教序などは毎日のように習うことです。
争坐位などに移る前に、今日はこれで：押

白雲先生の便り

陰山 光泉

ある日、田内さんと、塩瀬さんのお里で白雲先生の作品を見せていただく機会があり、白雲先生がどう云う方かも知らず、ご挨拶の後、先生から「私を知っていますか。」と問われ、私が「鏡村出身で川崎梅村と云う偉い書家の先生がいると聞いています」と答えると「そうですか、梅村を知っていますか、私が川崎梅村です。」と笑い乍ら云われたのが出合いです。何度となく滋賀県からリュックに入れて沢山の作品をご持参され、見せていただいたり、鏡村で揮毫して筆使い、線の強弱など皆さんと共に直接教わりました。

その後、鏡村に贈られた作品整理をお手伝いする事になり作品の多さに驚くと共に臨書作品は別冊ノートに詳しく解説付きで一つの全臨。又さまざまの表現の作品に驚きました。その後、係の方から日記の解説を頼まれ読ませていただきましたが、日本の北から南沖繩まで旅をし乍ら書一筋に勉強されたご苦労と勉強の足跡はすざましいものがあり、始めから終わりまで一字の乱れもなく書かれた書の説明と、絶えず残して来た弟子への心遣い、気配りが書かれた日記でした。老いても書の事になると毅然として師である川谷横雲先生、尚亭先生の尊敬話もよくして下さいました。

鏡村の美術館「リオ」はもとより安芸の書道美術館がお気に入り度何度か足を運ばれ、お便りには必ず大坪館長さんによるしくと書かれていました。書だけでなくいろいろの事を教わりありがとうございました。渋柿の熟した柿の好きだった白雲先生のご冥福を心からお祈りいたします。 合掌

川崎白雲作品集より (18)



川崎 白雲 先生

生涯の大恩人、川崎白雲先生
岡本 季也

30. 「起きてからいもをころばし焼く」 一九五四年（七五歳） 半切軸



135×35

左手で書いて習気を払い、変った造形のおもしろさを探究していた先生。道元の本をよみ、自然な人間の営みの中で精神を深めようとする先生。山で育った先生が、からいも（さつまいも）を焚火でころばしながら焼いている姿は、すぐに想像できる。先生の、うそのない自然な生活と表現が一致して、私の好きな作品のひとつである。書の魅力は人間の魅力。（春洋）

昭和十九年四月、大阪第二師範入学を許され書道を川崎梅村（白雲）先生に習い、昭和二十年十月末日半年振りで除隊、師範寮に再入寮、梅村先生ご指導、書の「一字書き」に入会を、同期小山健一君に誘われ、先生独特の魅力にひかれ、かよいつづけました。

高知師範に帰られた川崎先生のあと、水嶋鶴山（山耀）先生に教わり、昭和二十二年三月卒業、府下小学校に奉職、年明けて一月三日友人と四名で先生お宅を訪ね、先生・奥様・お子達（久子様と弟さんの二人）が快く迎えてくださいました。さらにその年の六月再度お邪魔をしてみんなで猿狩りを楽しみました。

鈴木翠軒先生が二版唐紙に書かれたお手本を、そのたびに川崎先生に何度も見せていただき興奮することしきり、淡墨で書かれた翠軒書のすばらしさに打たれつばなしました。

後日、川崎・水嶋先生の大きなお力で、翠軒先生に入門を許され、ぼくの一生のみちすじを決めていただくことになりました。まさに生涯の大恩人川崎白雲先生です。

ご郷里高知市鏡村には大きな書のアート館、晩年の大津では先生が入寮されていた老人施設においても、書の学習会、お年寄りをあつめての楽しい集まり、人生におけるわけへだてのないお人柄、何人をも包みこまれるご人徳は仰ぐばかりです。

現在、施設で生を養っておられる先生の奥様にお目にかかれたことは、久子様ご夫妻の親孝行のあらわれです。いつまでも変わらないご誠実と、あつい深いおつきあいをいただき何くれと教わっている今でございます。

川崎白雲作品集より (19)

30. 「起きてからいもをころばし焼く」一九五四年（七五歳）半切軸



135×35



生涯の大恩人、川崎白雲先生

岡本 季也

昭和十九年四月、大阪第二師範入学を許され書道を川崎梅村（白雲）先生に習い、昭和二十年十月末日半年振りで除隊、師範寮に再入寮、梅村先生ご指導、書の「一字書き」に入会を、同期小山健一君に誘われ、先生独特の魅力にひかれ、かよいつづけました。

高知師範に帰られた川崎先生のあと、水嶋鶴山（山耀）先生に教わり、昭和二十二年三月卒業、府下小学校に奉職、年明けて一月三日友人と四名で先生お宅を訪ね、先生・奥様・お子達（久子様と弟さんの二人）が快く迎えてくださいました。さらにその年の六月再度お邪魔をしみんなで螢狩りを楽しみました。

鈴木翠軒先生が二版唐紙に書かれたお手本を、そのたびに川崎先生に何度も見せていただき興奮することしきり、淡墨で書かれた翠軒書のすばらしさに打たれつばなしました。

後日、川崎・水嶋先生の大きなお力で、翠軒先生に入門を許され、ぼくの一生のみちすじを決めていただくことになりました。まさに生涯の大恩人川崎白雲先生です。

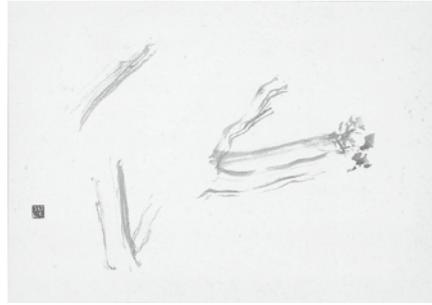
ご郷里高知市鏡村には大きな書のアート館、晩年の大阪では先生が入寮されていた老人施設においても、書の学習会、お年寄りをあつめての楽しい集まり、人生におけるわけへだてのないお人柄、何人をも包みこまれるご人徳は仰ぐばかりです。

現在、施設で生を養っておられる先生の奥様にお目にかかれたことは、久子様ご夫妻の親孝行のあらわれです。いつまでも変わらないご誠実と、あつい深いおつきあいをいただき何くれと教わっている今でございます。

左手で書いて習気を払い、変った造形のおもしろさを探究していた先生。道元の本をよみ、自然な人間の営みの中で精神を深めようとする先生。山で育った先生が、からいも（さつまいも）を焚火でころばしながら焼いている姿は、すぐに想像できる。先生の、うそのない自然な生活と表現が一致して、私の好きな作品のひとつである。書の魅力は人間の魅力。（春洋）

川崎白雲作品集より (20)

32. 「仏」



46×66

筆が紙にふれるか
ふれないかの処での、
白雲先生のたたかい。
無我の境地か？
(春洋)



川崎先生の「人の立場に立つ」
その書との出会 奥村和治

昭和六十三年私が大津市立皇子山中学校のPTA会長の役を受けた年、中学校は三年前より学校が荒れに荒れ教師暴力はもろろん、たばこは吸う、トイレのドアは破る、菓子は食べ放題、校内はごみだらけ、昭和六十二年五月、一度父親に集まってもらって話し合いの場を大教室で行った百八十名の参加の荒れている生徒を排除せよとか、いろいろの意見が出ましたが結果は母親に当番制で出て頂くことに決まり、近所のおばあちゃんの顔と声掛けが一番となつたのです。PTA、生徒会、教師が一丸となつて取り組み、その間に川崎先生にご相談させて頂きお話の中に哲学とは「人に迷惑を掛けないこと」「人の立場に立て」二つの言葉を教えて頂き役員皆さんと話し合い生徒との話の中に良いものは良い、悪いものは悪いとはつきり区別しようとして行動した。少しずつであるけれども以前の姿にもどりつつあつた。体育祭、文化祭も良くなり盛り上がり上がつた。川崎先生からの一枚の書「人の立場に立つ」を頂き二尺×十三尺の大作でした。表具をしその裏に卒業する生徒、三百八十五人が自分自身でサインシクラス別に貼り合わせ、完成しこの書が生徒の心にひびき毎日の行動を替えていったのでした。卒業式には体育館に吊り上げ会場を盛り上げた。式典が始まり、あの子達私語なし一同来賓合せて礼をする、など物の見事にやつてのけたのです。式典後親と子が書の前で抱き合つて泣いている姿が多く見られ会場の涙を誘つた。今でも皇子山中学校の大教室正面に飾っています。大津市の宝物としてこの書が生きています。又、人の歩む道を照らし、いつまでも輝いてほしいのです。川崎先生ありがとうございます。

35. 「健康は福の基」一九八五年(76歳)



135×35